

ラオスのこども通信

33号

2005年4月発行

発行：特定非営利活動法人 ラオスのこども 〒143-0025 東京都大田区南馬込6-29-12, 303 TEL/FAX 03-3755-1603



特集 子ども文化センターの新しい展開……2

ラオスで20か月 社会と子どもたちを見つめて……4

活動の報告 プロジェクトの動き……6

国内の活動／ボランティア掲示板……8

お知らせ ラオス語おもしろ話……9

ヴィエンチャン事務所／東京事務所から……10

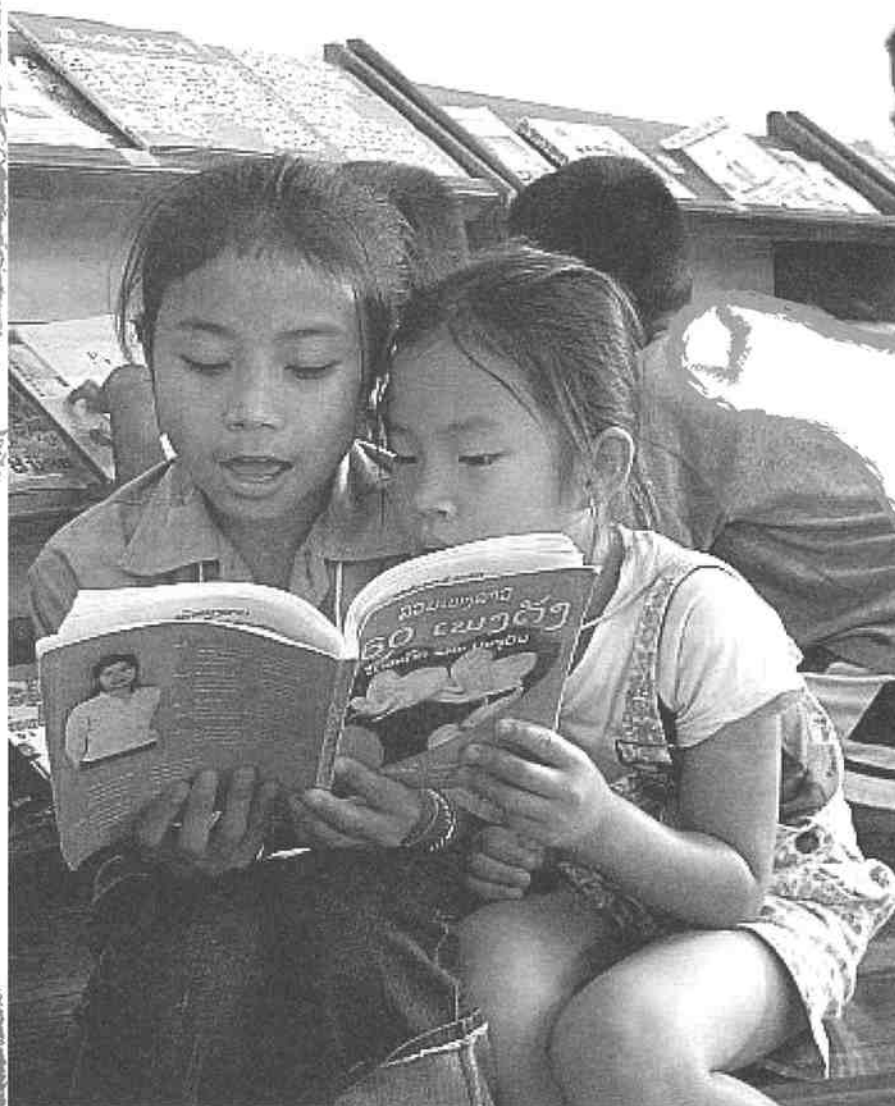
NGO ネットワーク……11

活動に参加し支えてくださったみなさん……12

子ども文化センターの新しい展開

ラオスで子ども文化センター活動が始まって10年。

2005年1月、新しいタイプの「ヴィエンチャン子ども教育開発センター」がオープンしました。



新しいセンターの図書室で、なかよく本を楽しむ

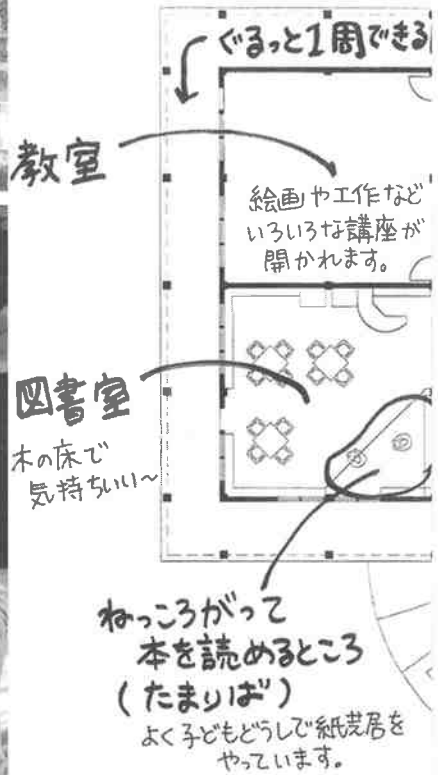
特定非営利活動法人ラオスのこどもは、子ども自らが学ぶ力を伸ばしていくために、ラオスで、「絵本、紙芝居などの出版」「図書室」「集い楽しみ学べる場」などの支援を行っています。

子どもたちの活動から 先生が学ぶセンターが誕生！

新しい
「子ども」



2月に発足した「ヴィエンチャン子ども文化センター」これまでの子ども文化センターとして、この新しいセンターは「先生が学ぶ空間」である。このセンターはヴィエンチャンで開かれます。



このセンターが画期的なのは、教員の研修施設の中に、子どもが自由に活動する場を設けるという発想で、これは、ヴィエンチャン都教育局から会に持ちかけられた提案でした。

先生方が子どもたちの活動に直に触れることで、従来の教科書を覚えさせる授業中心の教育現場を変えようというのが、ねらいです。

<写真>

上：センター建物外観

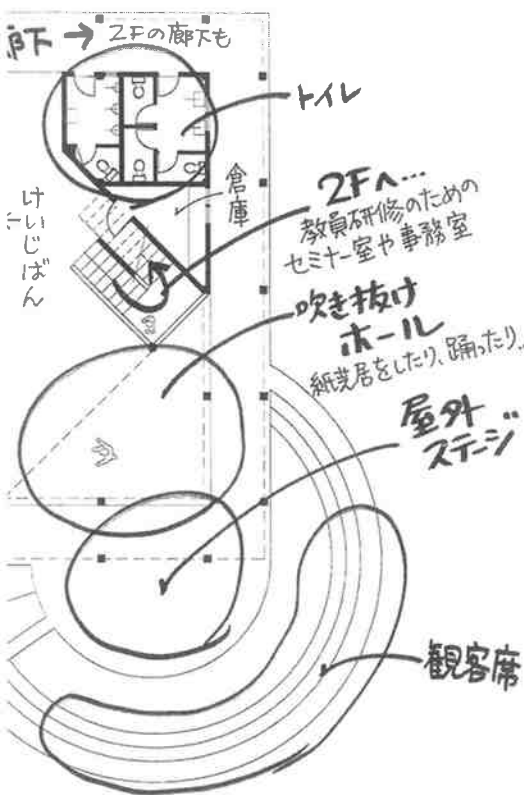
中：3月12日、近隣の小学校の子どもたち、先生たちを招きお披露目イベントを開催。屋外ステージでの踊りの発表

下：同イベントで、パソコン体験コーナー



「子ども文化センター 教育開発センター」

「チャン都 子ども教育開発センター」。
 一が、子どものための場であるのに対
 、加えて、「子どもたちの活動から、
 いう意図が込められています。
 ン都教育局が運営し、会が支援してい



＜写真＞

全てお披露目イベントの時の様子
 上：綱引き（奥の建物はヴィエン
 チャン都教育局）
 中：木陰で行われたちぎり絵
 コーナー
 下（左）：図書室
 下（右）：近所のお寺からお坊
 さんが参加し、子どもたち
 にクイズを出題

今回新築された建物は、672㎡(約200坪)
 の鉄筋コンクリート造2階建て。1階が
 子どもたちのスペース、2階が先生方の
 再訓練のための場となっています。
 子ども用スペースは、一段高くなった「た
 まりば」をもつ図書室を中心に、さらに
 活動のための教室を一つ備えています。
 1階に大きな吹抜を持つホールが、この
 建物の特徴で、その一部は舞台となり、外
 部に設けられた観客席とともに、皆が集
 まり楽しむことができる屋外ステージを
 形成しています。
 建物を取り囲む回廊は、内部と外部の芝
 庭を結び、本を読んだり、絵を描いたり、
 遊んだりできる自由な空間で、子どもた

ちの工夫しだいで、利用の仕方が広がる
 ように意図されています。

基本設計は、会の事務局長野口朝夫が建
 築家としての本業を生かして、ボラン
 ティアで引き受け、建設費は在ラオス日
 本大使館のNGO支援無償資金協力によりま
 かなわれました。工事監理は国際建設技
 術協会の支援により野口が行っています。

この新しいタイプのセンターでの活動が、
 子どもたちと先生方に大いに刺激を与え、
 教育の質の向上につながっていくことが
 期待されています。



ラオスでの20か月 社会と子どもたちを見つめて

2003年1月から2004年9月まで、ラオス事務所員としてラオスに駐在したスタッフによる報告



紙芝居を演ずる子どもボランティア（ヴィエンチャンCCC）

ラオスの灯籠流しの日、バナナの葉やマリーゴールドの花で飾った灯籠に灯をともし、願いをかけてメコン川に流す。灯籠は闇の中をゆらゆらと川の流れに向かって行く。メコン川の流れは思ったよりはるかに速い。岸边に留っている灯籠、流れの速さに負けて転覆する灯籠。上手く流れに乗った灯籠は、下流に向かってわき目もふらずに川面を駆けて行く・・・そんな光景を思い出していると、現在のラオスの社会とそこに生きる人々に見える。

■変わりゆくラオスの社会

ここ数年のラオスの変化は著しい。道路は舗装され、朝夕はバイクや新車が列をなし、ちょっとした渋滞が起きる。道の両側にはおしゃれなディスプレイの店やカフェ、VCD（ビデオ）屋が並ぶ。若者たちはジーンズをはき、ケータイで話し込む。郊外には近代的な家が次々と建ち、衛星放送のアンテナをつけた家々のテレビでは、今日もタイの華やかな番組が流れ、家族はVCDの外国映画に釘付けになる、あるいはカラオケで盛り上がる。一方、書店は相変わらず少なく、街中で新聞を読む人もほとんど見かけない。こんな光景はヴィエンチャンや地方都市に限らない。小さな町でも衛星放送のアンテナやVCD屋は容易に見つかる。

このように消費生活は急速に発達しているが、生活用品はほとんどタイや中国からの輸入品で、ラオスの産業の発達には結びついていない。増加する労働人口を受け入れる産業基盤は未整備で、失業率は高く、学校を卒業しても職を得られない若者たちが多い。

また、従来の口承文化から、文字文化を飛び越して一気に映像文化が入り込んできている。人々は映像情報を咄しゃくする術を持たないまま、表面的な華やかさに刺激された結果、映像文化の負の部分が増大化し、非行や生活習慣の乱れが社会問題となってきている。

■子どもたちをとりまく2つの問題

このような社会で、子どもたちの状況に関しても2つの大きな問題が発生してきた。1つはストリートチルドレン、もう1つは薬物汚染だ。

社会の発展に伴い、都市部と農村・山間部の地域格差が広がっている。このような状況で、故郷で生活が成り立たなくなって都市に流入してくる家族が増えるにつれて、ストリートチルドレンの姿が目立って増えてきた。親たちはゴミを拾い、子どもたちには物乞いをさせて、日々の生活をしのいでいる。昼間、同年代の子どもたちが学校で学び、夜は家族と団欒している



『マニユイとチャンタイ』を読む子どもたち
(ヴィエンチャンCCC)

時に、外国人観光客が集まるスポットに来て、小さな手を合わせて物乞いをしている姿は痛々しい。

薬物汚染についても、政府は様々なメディアで薬物の恐ろしさを訴えているが、常用者は広がる一方のようだ。薬物絡みの非行や犯罪も後を断たない。この現象の根本には、外国の華やかな映像と現実のギャップの中で、若者たちが感じる閉塞感があるような気がする。駐在中に薬物更生センターを訪問したことがある。施設内には無力感が漂っていたが、若者たちは歌を歌う時は生き生きと手拍子をとっていた。彼らがもっと早く、自分自身を見つめ、表現する術を身につけていれば、ここに来ることはなかったのかもしれない。

これまで子どもたちは、一步を踏み出して自ら未来を開くことができない状態だった。それでも、そこに留まっていれば生きていくことはできた。しかし現在の社会では、留まっていたら流されて溺れてしまう。その意味で、子どもたちにとってより困難な時代になっているのではないだろうか。

■今のラオス社会にとって必要なもの

そのような社会で必要とされているのは、自ら考え、この社会の価値を創り出し、自分のことばで国内へ、国際社会へと発信していく人材だろう。当会は子どもたちが本を読み、考え、表現し、力を伸ばしていける環境作りに取り組んできた。これらの活動は、都市型の問題が顕在化している今こそ必要とされていること、そしてこれらの問題に取り組むために、活動が新しい段階にきていることを改めて感じる。

近藤知子

図書室にやってくる子どもたち

事務所の一階にある図書室にはいろいろな人がやって来ます。若いお坊さんや新聞を読みにくる大人もかなり増えています。もちろん、いろいろな子どもも。

ある土曜日、背の高い男の子がふらりと現れ、ポケットから出したのはクシャクシャになった図書室の利用カード。スタッフ達に「久しぶり」と声を掛けられていました。前はよく来ていたのに、最近、姿を見せなかったそうです。聞くと「親の手伝いで忙しくて来られなかった。学校にもあまり行っていなかったの、今年、とうとう3回目の中学1年生をやることになった」とのこと（つまり2回落第した）。「本を読むことは好きじゃないんだけど、ここでみんなと歌をうたったりするのが好きだから、久しぶりに来た」と教えてくれました。

平日の学校がある時間、10歳ぐらいの男の子がやってきました。スタッフが「学校はどうしたの？」と声をかけても返事がなく、ひとりで本を読んだり、ベンチに寝転がったり。昼時になっても帰らないので「お昼ごはんは？」と訊ねても、「いらない」と一言。それでも、スタッフが甘いココアを作ってあげると、おいしそうに飲み干しました。午後はスタッフの作業を手伝い、夕方になると帰っていきました。彼にとって、その日を図書室で過ごしたことは、きっと大事なことだったのでしょ。

ある日の午後、黒いTシャツにカーキ色のズボン、髪を逆立てた(!?) 見慣れない風体の若者が3人、アルバイトのアナチャックを訪ねてきました。アナチャックは嬉しそうに図書室を案内。聞いてみると、ファーグム王の銅像前広場で知り合ったとのこと。どうやら、仕事がないのでフラフラしているようでした。しばらくすると、2階から賑やかな声が見に行くと、たまたま学校が休みなのでやってきていた5、6歳の女の子2人と一緒に、『文字絵本』を楽しそうに読んでいました。しばらくして帰って行く彼らの姿を見送りながら、心の中で「また来てね」と声をかけていました……。

赤井朱子

プロジェクトの報告

2004年11月-2005年2月

読書推進プロジェクト

●読書推進活動指導研修を

サイヤブリ県にて開催

(2月22日～27日)

「本当だった」研修の最終日、サワンナケート県からの参加者の感想。「今までサイヤブリ県の読書推進活動が充実している話を、会のスタッフから聞いていたけど半信半疑でした。今回この研修に参加して、自分の目で見てよくわかりました。私も地元に戻って出来ることから実践してみようと思います」



今回の研修は、各地域で読書推進活動を指導するキーパーソンを育成することを目的として、読書推進活動の先進地域であるサイヤブリ県での実践活動を学ぶものである。開発パートナー事業のプロジェクト対象地域である10県から、教育局の読書推進担当官及び教育指導官各1名ずつ、合計20名が参加した。訪問先は、全部で10箇所。短い日程で訪問場所が多いため、もう少しゆっくりと話を聞きたかったと言う声もあったが、市内と郊外、小学校と中学高校など、様々な状況の学校を見ることで、読書推進活動の幅広さやネットワークの重要性をより明確に理解することができた。

訪問した学校で共通していたことは、
・PTA支援の教材費の一部や手作り

の物品を販売した収益などを使い、自力で図書を補充している

- ・専任の図書担当教員がいる
- ・休み時間と授業時間、2段階で図書に接する機会を設けている

どれも他県ではほとんど実践されていないことばかりである。

学校は、地域住民に理解をもとめ、図書購入資金を確保するよう努力している。郡の教育指導官は、各学校の活動状況を把握し、要望や報告を県に提出する。県教育局は、ヴィエンチャンの関係各所に働きかけ補充図書を確保し、必要な学校に配分する。それぞれが連携することで、活動を充実させてきた。

「田舎では、地域住民から資金を集めることは難しい」という参加者に対し、サイヤブリ県の担当者はこう答えた。「サイヤブリでも、はじめから得られたわけではありません。まずは住民に活動内容を知らせ、理解してもらえるように働きかけてきたのです。次第に保護者が自分の子どもの変化に気づき、支援をしてもらえるようになりました」

郊外のナーレーン小学校には、村人の手によって作られた図書室がある。図書室といっても、木製校舎の側面を、壁と屋根をちょっと延長して作っただけの簡単な部屋である。その簡素さに驚いた参加者が聞いた。「壁に隙間があるような部屋なのに、本が紛失したりしないのか？どうコントロールしているのか？」村人の代表が答えた。「本はなくなりません。この学校の図書室は村人がみんなで建てたものです。村人たちは、教育が重要であることを理解していますし、この図書室は子どもだけでなく、誰もが利用できる、村の図書室なのです。自分たちのものですから、みんな大事にします。」

研修の最終日、参加者はそれぞれ行動計画を作成した。10県の計画は1冊にまとめられる。これは、参加者からの希望で、全員に配付されることになった。普段は違う県で仕事をしているが、同じ研修に参加した仲間として、それぞれの行動計画がきちんと実行さ

れているか、お互いに確認できるようにするためだ。

次は、10県のどこかが研修先なるだろう。楽しみだ。

(赤井朱子)

●図書箱・図書袋の配付 図書の補充
以下の地域の学校に、図書箱・図書袋の配付、図書の補充を行うと共に、各校の担当教員を対象に読書推進セミナーを開催

- 11/17-19 サラワン県 179校
- 12/9-11 ボーケオ県 150校
- 12/23-25 セコンン県 70校
- 1/25-27 ヴィエンチャン県 60校
- 1/31-2/2 ヴィエンチャン都 40校
- 2/10-12 カンムワン県 40校

読書推進活動の実施状況を把握するため学校を訪問し、聞き取り調査を実施

11/10-11 ヴィエンチャン都 6校

11/16 サラワン県 6校

12/6-8 ボーケオ県 8校

12/21-22 セコンン県 6校

1/5-6 ヴィエンチャン県 6校

2/8-9 カムワン県 7校

(支援; JICA「開発パートナー事業」)



●教員養成校における人材育成事業

卒業年次生を対象に読書推進セミナーを開催

- 11/22-26 ドンカムサン教員養成校
- 12/6-10 バンクン教員養成校
- 12/7-10 サラワン教員養成校
- 12/20-23 ルアンナムター教員養成校
- ※ルアンパバン、パクセ、サワンナケートの3校は、週1回のカリキュラムで実施。

(2月～3月 実施状況の調査を行う)
(支援：国際開発救援財団)

●学校図書室開設

6校で学校図書室を開設することができました(数字は学校図書室の愛称「ハクアン」の通し番号)

11/1～6 ポリカムサイ県

ハクアン111 開設サイサヴァン幼稚園

ハクアン112 開設トンセン小学校

ハクアン113 開設ナーコンサイ中学高校

ハクアン114 開設ナムトン小学校

ハクアン115 開設ナークア小学校

(支援：CANADA FUND)

11/21 サワンナケート県

ハクアン124 開設 ケーンコックヌア小学校

支援：Lao-Japan Airport Terminal Service)

出版プロジェクト

●絵本

翻訳絵本 『長靴をはいた猫』

原作：シャルル・ペロー／翻訳・絵：シッコウ・ミラーコーン

2000部印刷／フランス語協力センター・自己資金



おなじみの童話の翻訳版。ユーモラスでクセのある猫の絵が印象的です。フランス語協力センターとの共同出版は、「星の王子様」「おやゆび小僧」に続いて3作目です。

●紙芝居

『サカナちゃんのお留守番』

作・絵：ブンルート・シヴィサイ

2000部印刷／沖電気工業(株) 愛の100円募金

魚の視点からゴミの投げ捨て問題を考えさせる紙芝居。お母さんを待ちきれなくて、ひとりで探しに出たサカナちゃんが、空き缶に捕まったり、ビニール袋に閉じこめられたり、数々の危険に遭遇。最後は帰ってきたお母さんに間一髪で助けられます。

昨年完成した『家のまわりの冒険』- トイレでの用足しと手洗い-、『森のお化けと汚い水』- 清潔な飲料水- (以上2作品は国際ボランティア貯金の寄付金による) と合わせ、衛生教育紙芝居3部作がそろいました。子どもたちに衛生的な生活習慣の大切さを楽しく伝える教材として配付され、学校図書室や子ども文化センター図書室などで活用されます。



指定募金

2004年末「あとひといき！」キャンペーンのご報告

前32号で、「もっともっと絵本募金」と「こどもの未来募金」へのご協力をお願いしたところ、たくさんの募金が寄せられました。

●「もっともっと絵本募金」

一口1500円

目標「あと33口」のところ、1月20日までに83口が集まり、2002年10月以来の合計が340口となり、絵本3400冊を印刷できることになりました。(32号P.7では、2004年7月～10月分を47口と記載していますが、37口の間違いでした)

『数字ちゃんはどこ?』は、現在印刷中です。1月21日以降にお寄せいただいた募金は、次の絵本(作品未定)の印刷費とさせていただきます。



●「こどもの未来募金」

一口2000円

目標「あと28口」のところ、2月末日までに12口が寄せられました。ヴィエンチャンCCCとサイヤブリCCCの合わせて6つの講座を半年間(2005年1月～6月)運営することができました。

ご協力いただいたみなさま、ありがとうございました。

「もっともっと絵本募金」は、引き続き募集中です。ご支援よろしくお願ひします。

特別プロジェクト

●小学校1・2年の教科書支援

新学期に配る教科書が足りない、とのラオス教育省の緊急要請を受け、今年度限りの特別支援として、11月に1・2年生のラオ語と算数の教科書を各5000部印刷した。数少ない教科書が有効に活用されるよう、読書推進のノウハウを活かし、配付にも協力している。12/23-25 セコーン県 73校(小1ラオ語・算数各1657冊/小2ラオ語・算数各1549冊)

(支援：日本国際協力財団)



(イラスト：勝占紀子/ボランティア)

国内の活動

2004年11月-2005年2月

イベント

ご来場、ご参加、ご協力いただいたみなさん、ありがとうございました。収益は活動資金として大切に活用させていただきます。

●カラワンコンサートでパネル展示

11/3 旧JR 大社駅舎（島根県）
タイのカラワンバンドのコンサートが行われた出雲市の会場で、会の活動を紹介するパネル展示が企画され、地元の留学生ノー君が、ラオスや会の活動について説明しました。協力：米山綱雄さん（出雲市）

●OTA ふれあいフェスタ

11/13～14 平和島競艇場（東京）
主催：OTA ふれあいフェスタ実行委員会、大田区
約30万人の人出がある地元・大田区の地域イベントで、会は毎年ボランティア主体で参加しています。今年は活動紹介のパネル展示、ラオスコーヒーの販売、バザーを行いました。会の内外から多種多様な品物の寄贈を受けてバザーの売れ行きも絶好調。肌寒い日でコーヒーもよく売れました。

●いのり題目の日

「NGO 国際支援クラフトショップ」
11/27 妙法寺（東京）
主催：日蓮宗東京都西部宗務所
世界の平和をいのりというテーマに合わせ、NGO 6団体が国際色豊かな手工芸品を販売するコーナーが設けられ、会もラオスの布製品、ポーチやバッグなどを販売させていただきました。また、書き損じハガキ等の寄付もいただきました。

●ラオス帰国報告会

「読書推進運動支援プロジェクトの現場から」
11/30 東京ボランティア・市民活動センター（東京）
主催：ラオスのこども
近藤知子が、主にNGO関係の方を対象

に、現地プロジェクトの成果と課題を報告。14名が参加し、活発な質疑が行われました。

●ラオス帰国報告会

「絵本が変える 子ども、学校、社会」
12/9 キッコーマンKCCホール（東京）
主催：ラオスのこども
協力：キッコーマン株式会社
10月、11月と開催してきた近藤知子スタッフの帰国報告会の最終回。広く一般を対象とした内容で、幅広い年齢層、様々な職業、多様な関心を持った27人の方が参加。ラオスのおしるこ、コーヒー、お菓子付き、紙芝居の実演あり、と盛りだくさんで、質疑応答の時間が短くなってしまいましたが、楽しんでいただけたようでした。

●NPO・区民活動フェスティバル

2/20 こらぼ大森（東京）
主催：NPO 活動団体交流会
地域で活動する団体の紹介と、団体同士の交流を目的としたイベント。来場者は少なめでしたが、同じ大田区内のNPOのみなさんと交流することができました。

●山王会館交流会 「世界のおまつり」

2/27 山王会館（東京）
主催：大田区 国際・交流支援課
区内在住の外国の方との交流イベントの15回目。日本のひなまつり、中国の旧正月、ラオス正月、インドの人形まつりを紹介。会はバーシー体験、お菓子の試食、活動紹介を行い、4月のお正月パーティーの宣伝も。参加者は40名ほどでした。

チャリティブックフェア

●キヤノン株式会社

11/23 チャリティブックフェア2004
ボランティアデー
今年も、社内古本バザーの準備にスタッフ2名とボランティア2名が参加し、社員のみなさんと一緒に古本の仕分け・陳列作業を行いました。休憩時間には活動報告をさせていただきました。（毎年フェア売上によるご寄付で、絵本や紙芝居の出版と学校図書室や図書補充をご支援いただいています）

●東京海上日動火災保険株式会社

12/15～16 チャリティブックフェア&NGO・NPO フェア
年末恒例のフェア会場内にNGO・NPOの販売コーナーが設けられ、9団体が出店。会はラオスの手工芸品を販売させていただきました。（2003年のフェア売上によるご寄付で、2004年に学校図書室の開設をご支援いただきました）

紙芝居

第5回手づくり紙芝居コンクールで優秀賞

一般の部『わたしの子ども』作：チャンドラー／絵：アヌソン
作者はポリカムサイ子ども文化センターの職員。11/21、神奈川県立図書館で実演審査会があり、チャントソンがラオス語で、ボランティアの小熊智恵美さんが日本語で代演しました（翻訳はボランティアの野田幸枝さん）。卵を温めないアヒルに代わってニワトリのお母さんがヒナをかえし、自分の子どもたちとわけへだてなく育てるというお話。絵もほのぼのとして、ラオスの穏やかな日常生活の様子が伝わってくる作品です。



（イラスト：勝占紀子／ボランティア）

ボランティア掲示板

<活動報告>

● 11/6 活動説明会

現地プロジェクトやボランティア活動などを詳しくご紹介。実際にラオス語絵本プロジェクトを体験していただきました。10月の国際協力フェスティバルで会のブースを訪ねてくださった方など6名が参加。

● 11/20 ラオスのこども基礎講座

ボランティアが「そもそも会の設立は～」という話を聞く機会は意外と少ないのが現状です。しかしイベント来場者から質問を受けることもあり、きちんと知りたい、という希望が多く、勉強会を開きました。1時間目は「ラオスのこどもの歴史と理念」を事務局長の野口が、2時間目は「現地プロジェクトの概要」をスタッフの近藤が、お話ししました。(12人参加)

● 1/22 ニュースレター検討会

「ラオスのこども通信」をもっと魅力的なものにしたい、とボランティアの発案で関心のある人が集まり、意見交換。記事については、「初めて読む人にも親しみやすく」「現地活動のプロセスが具体的にわかるように」「日本の私たちに何ができるのかを伝えたい」といった意見が出されました。(9人参加)

<今後の活動予定>

参加される方は事務局までご連絡ください。会場はラオスのこども事務所。都営地下鉄浅草線「西馬込」南口から徒歩7分。(道順はお問い合わせを)

電話 03-3755-1603 deknoyao@rifty.com

注) 日時が変更になることもあるので、事前に必ずご一報ください。

● 5月21日 (土) 15:00～

活動説明会 ラオスについて、活動について、ボランティアについて、もっと知りたい方。お気軽にご参加ください。参加費300円(ラオスコーヒー付)、定員5名(要予約)

● 6月25日 (土) 13:30～

「ラオスのこども通信」34号発送作業

● ボランティア活動日

(事務サポート作業やイベント企画、準備など。ボランティア相談も随時)

以下の土曜日の午後(13:30～17:30)を予定しています。

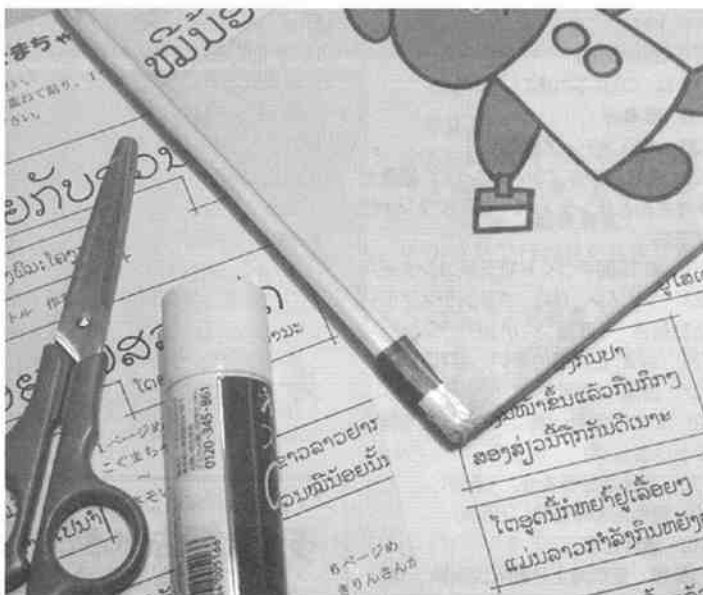
5月14日、28日

6月4日、18日

7月16日、23日、30日

<お知らせ>

「ラオス語絵本プロジェクト」の 翻訳シートがわかりやすくなりました



絵本に貼り付けるラオス語翻訳シートが、新しく変わりました。字がかすれて読みにくかったもの、手書きの文字(日本語)が読みにくかったもの、両端の文字が切れて見えなくなっていたもの……。これらを、もっとわかりやすく、このプロジェクトに参加する全国のボランティアのみなさんが作業しやすいように、また、ラオスの子どもたちが読みやすいように、全て見直して、作り直しました。完璧とは言えませんが、少しは改善されたと思います。

それから、これまで絵本リストで「★準備中」と表示されていた絵本のうち、「ちいさなねこ」など、いくつかは翻訳シートができあがりしました。翻訳を貼ってラオスへ送れる絵本が増えましたので、これからもっと多くの人に、このプロジェクトに参加してほしいです。絵本リストの修正版は事務局までご請求ください。

実は私はこの1年間、事務局で翻訳シートをコピーしてみなさんに発送する作業のボランティアを週1回してきました。コピーしながら、読みにくいところや、わかりにくいところを見つけたので、全部のシートをチェックして作り直すことにしたのです。大変な作業でしたが、自分自身のラオス語の勉強にもなって、一石二鳥のボランティアでした。

今後、みなさんが貼付作業をされたときに何かお気づきの点がございましたら、その都度ご指摘ください。もっと良いものができるように引き続き取り組んでいきたいと思っています。

(長野郁代/ボランティア)

NGO ネットワーク

「子ども参加」を学ぶ

「アジアの実践者に学ぶ 国際協力NGOのための子ども参加ファシリテーター養成ワークショップ」に参加

1月15～16日 国立オリンピックセンター（東京）

講師：アイリーン・フォナシア＝フェリサルさん（ルンドウヤン財団代表／フィリピン）

この数年、子どもに関わる活動を行っている世界のNGOでは、活動の基本を「子どもの権利条約」におき、「子ども参加」を大切にしていこうという動きがあります。しかし日本のNGOでは、まだ「子ども参加」は十分に理解され、生かされているとは言えません。こうした状況を改善しようと、5年ほど前「南」の子ども支援NGOネットワークが形成され、様々な取り組みを行っています（野口は運営委員として参加）。

この1月、同ネットワークは、2003年作成の「子ども参加ガイドライン」をより活用してもらうために、子ども参加が進んでいるフィリピンから講師を招き、1泊2日のワークショップを開きました。

初日に日本の3つのNGOが実践例を報告。野口はラオスの事例として、ルアンパバンの人形劇による「子どもの権利」普及活動を紹介しました。ラオスでも、会が支援している子ども文化センターを中心に、さまざまな実践が行われています。

今回のワークショップには、会からスタッフ2名に加え、ボランティア3名が自主的に参加しました。以下はボランティアからの報告です。 野口朝夫

●実践のために、もっと学びたい

久留雅美

初日は子どもの権利、大きく分けて「参加する権利」「生きる権利」「育つ権利」「保護される権利」という4つの権利、および大人の権利とのバランス、また「子ども参加」を実践する上でのいくつかのポイントを学びました。2日目は、子どもが内に抱えている問題を、大人が気づくためのゲームを、実際にやってみました。

気づかされたのは、「参加する権利」を実際の活動に当てはめて考えるときに、他の3つの権利も同時に満たされなくてはいけないとアイリーンさんは考えていること、そして同時に大人の権利も満たされなくてはいけないということ。たくさんのかんことを教わったけれど、それを自分で実践していくためには、もっと学ばなければと思いました。

●「子ども参加」、実は自分の周りの人間関係にも…

山本功子

このワークショップのことを初めて聞いた時には、あまり身近に感じませんでした。実際に子どもと一緒に活動することは少なく、「子ども参加」を切実に感じる事がなかったからです。でもワークショップに参加して、「子ども参加」を実践するには互いの権利を尊重し、相手の立場に立って考える、ということが重要であり、それは日常のあらゆる人間関係にあてはめることができるようになりました。

最後にグループに分かれてテーマごとに話し合いました。最初はみな遠慮がちだったのに、誰かが自分の中学生のときの体験話をしたとたん盛り上がり、お互いに体験に根ざした実感のこもった言葉で「自分たちの考える子ども参加」について話し合えたのがよかったです。

●子どもの生活背景を読みとることの大切さ

横山真紀子

みなさんは、親指はお父さん、人差し指はお母さん、中指はお兄さん、薬指はお姉さん、小指は赤ちゃんと思っていませんか。アイリーンさんは、♪親指どこ 親指どこ ここよここよ～という手遊びから、フィリピンのある女の子の話をしてくださいました。その子は「私は親指です」と言います。人差し指はお父さん（私たちが指し示す）、中指もお父さん（大きな声・大きな指）、薬指はお母さん、小指は兄姉。なぜ親指が自分自身なのか。「私は小さい、両親兄姉と一緒に暮らしている、私は家族から離れて暮らしていて、いつも一人ぼっちで家族の中に入ることができないから」と…。女の子の生活背景が見えてきます。手を見てください。親指は他の指から離れていますよね。でも、親指は他の指にやさしく包まれ守られる特別な指です。私は話を聞いて胸が苦しくなりましたが、最後の言葉に女の子も安心したのではないかと思います。

ワークショップでは、ゲームを通して子どもの気持ちや背景を引き出す方法をいくつか体験しました。ゲームでこんな時どんな気持ちになったか。などと質問して、答えから背景を読みとっていきます。向かい合って椅子に座り、「あなたのことを話してください」と訊くより子どもは話しやすいなと思いました。30人の大人が真剣にゲームを楽しみました。